

創刊57年6月4日
第三種郵便物認可
平成22年1月18日発行
毎月18日発行
12月10日発売
第23巻1号
[通巻333号]

2010
1

新潮45

333号記念特大号

262
「少女売買」その後
売春窟から救出された
ネパール少女たち
長谷川まり子

日本の行く末

佐伯啓思

漂流、鳩山内閣
野中広務

裏金太り「小沢一郎」が逮捕される日
岡本純一

新春特別対談

養老孟司 vs. 内田樹

“辺境”の民が誇る最強文化

「少女売買」その後 売春窟から救出されたネパールの少女たち

長谷川まり子

ノンフィクション・ライター

安住の地となるはずだった保護施設から少女たちは次々逃げ出した。夢見たのは、「恋愛」だった。

悲劇の少女

ネパールの少女チャンヌーは、幾重にも続く山並の彼方にヒマラヤを望む小さな村で生まれた。厳しい気候と急峻な地形が耕作を阻み、そこに生きる人々は常に厳しい暮らしを強いられていた。中でもチャンヌーの一家は、最貧層に属した。彼女は小学校にもあげてもらえず、幼い頃から家事や畑仕事を手伝った。10歳になると日雇いの労働に出て家計を支えた。しかし、いくら働いても、一日一食も口にできないような生活だった。

お腹いっぱい食べてみたい――。

それが、幼いチャンヌーのいちばんの願いだった。だから、12歳のあの日、遠縁の男が持ちかけてきた話に乗った。「カトマンズのカーペット工場を紹介してやろう。いい給料がもらえるよ」

その言葉に、これで貧しさから抜け出せる、親を助けてあげられる、と期待したのだ。

しかし、連れて行かれた先はインドの売春宿だった。男は、ネパールの少女をインドに供給することを、密かな生業としていた。

なめらかな褐色の肌と、あどけなさ

の残る丸い頬が客の人気を呼んだ。狭い部屋に閉じ込められ、一日平均40人の相手をさせられる。寝る間も食事も与えられないまま、100人を数える日もあった。

周囲では、望まぬ妊娠と危険な手段での堕胎が当たり前に繰り返されていた。HIVに感染し、骨と皮だけになり果てて、死んでいく女性もいた。そんな地獄のような生活が5年続いたある日、彼女はインド警察の摘発によって救出されたのだ。

そして、ネパールに送還されたチャンヌーは、首都カトマンズにあるNG

〇『マイティ・ネパール』に保護され
た――。

甘言に騙されて、今年間7000
人もネパール少女がインドの売春
宿に売られている。マイティは、そん
な絶望の淵から少女たちを救い出し、
社会復帰を助ける団体だ。カウンセリ
ングや医療ケア、職業訓練を施し、心
身の健康が回復した段階で、親の元に
帰すことを主たる活動とする。

1996年、取材をきっかけにマイ
ティの活動を知った私は、翌年、それ
を支援するNGO『ラリグラス・ジャ
パン』を立ち上げた。少女たちの境遇
が身につまされ、ほとんど衝動的に始
めたことだったが、年2回の現地訪問
と経済支援活動は今も続いている。

現地訪問を続けるうちに、少女たち
は私に信頼を寄せてくれるようになって
た。だが、このチャンヌーだけは、な
にかに怒ってでもいるかのように眉根
に皺を寄せ、声をかけても強い視線を
向けるだけだった。まるで全身を固い

殻で覆っているかのようだったのだ。

どんな過去を背負い、今、何を思っ
ているのだろう。私はチャンヌーを主
人公の一人として、2007年『少女
売買』という本を書いた。そこで彼女の
ことを少し理解できた気になっていた。
出会いから7年目の春だった。突然、
向こうから話しかけてきてくれたのだ。
「アンティ（筆者のこと）はなぜ、私
たちに会いに来続けてくれるのです
か？」

「それは、あなたたちが大好きだから
だよ」

この会話を機に、彼女は自分のたど
ってきた過去や胸の内に抱える苦しみ
を、少しずつ打ち明けてくれるようにな
った。しかし、そんなチャンヌーが、
想像もしなかった形で転落する。

「あとどれくらい生きられるかわから
ない。残された時間を家族と一緒に過
ごしたい。精一杯働いて、貧しい親を
助けたい」

2005年冬、彼女はそういって、

マイティから独立した。庭の整備の仕
事に就き、1日の休みも取らずに働い
た。しかし、教育のない若い女性の稼
ぎでは立ちいかなくなったのだろう。
2007年夏、身入りがいいという理
由で小さな酒場を開いた。そして、そ
こに出入りしていた客と関係を持ち、
その男と共謀して、少女をインドへと
連れ去ろうとした。

犯行は国境警察によって食い止めら
れ、チャンヌーはマイティに連れ戻さ
れた。

事件発生の一カ月ほど前からネパー
ルに滞在していた私は、弁解も謝罪も
せず、頑なに口を閉ざしたままの彼女
に激しい怒りをぶつけた。それでも最
後は、「どうかもう一度やり直して。

半年後、ここでまた会おうね」と、そ
の小さな身体を抱きしめた。彼女は
「ごめんなさい、ごめんなさい」と子
供のように泣きじゃくり、何度も頷く
ことで私の言葉に応えてくれた。

『少女売買』の記録は、ここで終わっ



行方不明のチャンヌー

ていた。

チャンヌーの涙を見たのは、出会ってから初めてのことだった。マイティの少女たちは、社会に棄てられた寂しさや将来への不安からよく泣く。しかし気丈なチャンヌーは、決して人前では涙を見せなかった。だから、自分の犯した罪を心から悔いているのだと信じられたのだ。

だが、チャンヌーの物語は、そこで終わったわけではなかった。

逃亡

その後、チャンヌーは、マイティの

監視の下、療養生活を送ることになった。男に誑かされ、知らず知らずのうちに犯罪に巻き込まれてしまったという事で、逮捕は免れた。だが、血液検査の結果、エイズ発症の診断が下されたのだ。

「チャンヌーは、部屋からほとんど出ることもなく、静かに過ごしています。以前のような元気はないのですが、治療もカウンセリングも素直に受けているし、問題はありません」

マイティ代表のアヌラダさんからのメールに、私は安堵していた。だから、彼女との再会の約束は、きつと果たされるものと信じていた。

しかし、2008年春、ネパールを訪ねた私を待っていたのは、チャンヌーが再び姿を消したという報告だった。マイティに保護されてから2カ月後、

年最大の祭ダサインを両親とともに祝いたいと、里帰りを願いだした。アヌラダさんは、2週間の帰郷を許可した。重い病を背負った娘に、貧しい親はな

んの治療も施せない。生きる場所はマイティ以外にないことを知るチャンヌーが、逃亡を図るとは考えられなかった。エイズを発症した彼女に対する、隣人の情もあつたようだ。

しかし、チャンヌーは約束の期限が過ぎてても帰らなかった。

年が明け、カトマンズには戻っていないらしいとの噂が流れたが、姿を見せることはなかった。

狭い街のことである。やがて、低所得者層が暮らす町外れの一角で男と女、衾し、朝から酒を呷るような暮らしをしているらしいと、風の便りに聞こえてきた。

治療も受けず、不摂生な暮らしを続ければ、彼女の残された時間は加速度的に削られていく。それは、自殺にも値する行為だった。

チャンヌーは、常に一目置かれる存在だった。

「被害者自ら、人身売買の廃絶を訴えるのが最も効果的です。チャンヌーの

スピーチは、本当にすばらしいのよ」

アヌラダさんはそういって、彼女を大舞台上に同行させた。2004年夏には、タイで開催された国際AIDS会議に出席し、ネパールにおけるHIV感染者の立場を訴えた。2004年秋には、日本の市民団体がアヌラダさんと彼女を招聘し、四国、福岡、東京で講演会を開催した。チャンヌーの言葉は聴衆の涙と感動を誘い、100万円を超える支援金が集まった。彼女はマイティのエアースとして、誰からも認められる存在だった。

そんなチャンヌーが、一転して軽蔑の対象に堕ちたのだ。マイティに戻ったからの生活は、針のむしろの上にいるようなものだったに違いない。

徹底して捜せば、居所を掴むこともできただろう。しかしマイティは、捜索に積極的ではなかった。

「里帰りする時、チャンヌーには2週間分の薬しか持たせなかったの。だから、きつと戻ってくると思っていたのよ。

よ。だって、薬を飲まなければどんなことになるか、あの娘はちゃんとわかってるのだから」

アヌラダさんの言葉に、チャンヌーの覚悟を見たような気がした。

チャンヌーの間

2009年8月、ネパールを訪れた私は、チャンヌーの過去に関する新事実を知らされた。

「ずっと秘密にしていたことなんですけど、実は私とチャンヌーは、救出される直前まで、一時期、同じ売春宿にいたんです。アンティは、チャンヌーもそこで無理やり働かされていたと聞いているでしょ？ でも事実は違うんです。本当は彼女、その店のマネージャーをやっていたんです。お金もずいぶん稼いでいたと思います」

それは、マイティのスタッフとして働くギータという女性の話だった。出会ってから7年目のあの日、チャンヌーは初めて心を開いてくれた。それを機

に、3年の歳月をかけて、彼女は少しずつ自分のたどってきた過去を語ってくれた。その一語一語に、彼女のすべてが込められていると信じた。だが、それは私の思い込みに過ぎなかったのだ。

チャンヌーが12歳でインドに売られ、売春を強要されていたことは事実にはない。が、彼女はいつまでも隷属していたわけではなく、ある時から幼い少女を使って金を稼ぎ、情夫と酒を酌み交わす自由を与えられ、上手く立ち回れば自分の宿を開くこともできる立場に成り上がった。その時点で、彼女は被害者ではなく、加害者となっていたのだ。

ギータはこの事実を、10年以上も隠し通してきた。アヌラダさんやマイティの仲間のもとより、チャンヌーとの間でさえ語られることなく、封印されてきたのだ。

インドから帰還した少女たちは、マイティに保護されるとまず、健康診断

を受ける。次に、人身売買された経緯や売春宿での生活について、事細かく聴取される。1、2度の聞き取りで、包み隠さずすべてを告白する者はほとんどいない。店で使っていた源氏名で通し、なかなか本名を名乗らない少女もいる。なぜなら、売春宿の経営者が、「一旦、この世界に足を踏み入れたら、外界の人間はすべて敵となる。だから、警察やNGOが救ってくれるなんて嘘もつと劣悪な売春宿に転売されるのがおちだ」

などと、恐怖心を植え付けているからだ。

マイティは、こうした洗脳を解くために、カウンセリングを繰り返す。その過程で、少女たちはさまざまな思惑を巡らす。カウンセラーは敵か味方か。

マイティは自分をどうしようとしているのか。そこが安全な場所であると確認できれば、彼女たちは次第に打ち明け始める。それでもやはり、事実を少しでも塗り替えようとするのだ。

例えば、「売春宿で、酒やタバコを呑んでいたか」と問われるとする。するとたいいていの少女は、「みんなは呑んでいましたが、私はやりませんでした」と答える。しかし、その口から覗く歯が、ヤニで黄ばんでいるのだ。ネパールにおいて、女性の飲酒や喫煙は不良行為であるとして非難される。だから彼女たちは、不適切な過去を隠し、支援者にとって望ましい自分を演出する。これから頼っていかねばならない相手に嫌われてはならないと、精一杯、保身に努めるのだ。

17歳で救出されたチャンヌーも、純然たる被害者を演じることで、自分の身を守ろうとしたに違いない。そして見事に、これまでの10年余を演じきったのだ。

「チャンヌーは、アンティが思っているよりずっと強かです。マイティにいたるのときにも、門番に高利でお金を貸していたの。彼女は頭がいいから、どんなことをしても生き抜いていくはず。

だから、あまり心配しないで」
ギータのいうとおりなのかもしれないかった。

私は、支援者という立場から、チャンヌーを美化していたのだと思う。幼くして売春宿に売られ、5年も働かさず仲間の手本とされるまでに立ち直り、貧しい親のために余命を生きようと、身を粉にして働き続ける健気な女性。それが彼女のイメージだった。けれどそれは、「彼女にこうあってほしい」という支援者側の願望だったのだ。

「男が欲しい！」

マイティから逃げ出したのは、チャンヌーだけではない。『少女売買』に記したもうひとりの被害者アプサラもまた、自由を求め、外の世界へと飛び出していった。

14歳で売られた彼女は、売春宿で客の子を身ごもり、マイティに保護され、間もなく女兒アーシャを出産した。

17歳の母は、父親の知れない娘の誕生に戸惑い、胸に抱くことさえ拒絶したが、次第に母性が育まれていく。やがてアーシャの成長は、アブサラの生きがいとなっていた。そんなアーシャを捨て、アブサラは男と出奔したのだ。

2008年春、彼女はひとりの男と出会う。彼は、麻薬の注射針によってHIVに感染した男性が運営する自助グループのスタッフだった。

マイティは、もつとも精力的にHIV/AIDS問題に取り組む団体として、今やネパール全土に知られる存在である。よって、同様の活動を行う他団体のスタッフが、アヌラダさんにアドバイスを求めるため、頻繁に訪ねてくる。この男も、アヌラダさんに面会に訪れた際、アブサラと出会ったのだ。

麻薬使用が原因のHIV感染者には、親の金で遊び呆け、その延長線上でつい誘惑に負けてしまったという輩が多

い。もちろん、麻薬ときっぱり縁を切り、立派に社会復帰している人もいるが、頹廢的な生活が改められない者が少なくないのも事実だ。マイティがこの男の身上調査をした結果、後者の部に属することがわかった。

ふたりは、一カ月足らずのうちに結婚の約束を交わしていた。相手の人間性を確かめる間もなく、自分の一生を委ねようとする彼女の浅はかさを、周囲は懸命に論じた。何より問題視されたのは、相手の男にアーシャを引き取る意思がなかったことだ。

「アーシャを捨ててはいけない。あなたは彼女の母親なのだから」

アブサラが最も信頼を寄せるナースが説得を重ねた。しかし、アブサラはどんな言葉も撥ねつけ、こう叫んだという。

「私は男が欲しい！ だから、どうしても結婚したいの！」

その激しい剣幕に、ナースは諦めるしかなかった。

売春宿に売られた少女たちの中には、辛さのあまり精神を病んだり、自殺を凶ったりする者もいる。しかしその多くは、生を希求するために環境に順応し、心の支えとなるものを見出す。店いちばんの売れっ子となることを、自己肯定の手段とする者がいる。経営者に従属し、肉料理やアクセサリーといったささやかな褒美をもらうことを喜びとする者がいる。しかし、最大の支えとなるのは、馴染みの客との恋愛だ。

私がインタビュールした人身売買の被害者は100人近くに上る。そのうちの何人かから、こんな言葉を聞いた。

「恋人がいました。私をいつも指名してくれるお客さんです。お土産をたくさん持ってきてくれました。彼が来てくれることが、いちばんの楽しみでした。他のお客を取る時は、彼の顔を思い浮かべながら抱かれました」

売春宿で女は、無数の男を相手に身体を開く。それは、性交という作業であり、相手の男は物体のようなものだ

ろう。しかし、相手に好意を抱いたとき、物体は男と認識され、その相手との行為は性交ではなく、性愛となる。そして心を伴う性愛には、肉体的な悦びが生じることもあったはずだ。

マイティは、アプサラに安全な生活を与えた。施設にいれば、衣食住も治療も娘の養育も心配することはない。しかし引き換えに、よき母として羊のように生きることを望まれる。それは彼女にとって、真の救済ではなかったのだ。

「私は男が欲しい！」

アプサラのあの叫びに、彼女の求めていた救済の形があったのだと思う。

彼女の消息は今も知れないままだ。

アーシャは、「マミー」という言葉を一切、口にしないことで、母に捨てられた事実を受け止めているようだった。

失われた未来

ニーサもまた、恋を心の支えとして生きようと、行方をくらしました。

13歳でインドに売られた彼女は、チャンヌーやギターと同時期に救出され、マイティに保護された。クルクルと動く大きな瞳が印象的な活発な女性だった。物静かなチャンヌーとは対照的だったが、聡明な努力家という性質は共通していた。

客相手の仕事をしたいという本人の希望により、6年の保護生活の後、マイティの援助で10坪ほどの雑貨店を開いた。自立を果たし、他の女性の手本となつてほしいという、アヌラダさんの期待の表れだった。

しかし彼女は、その期待を裏切った。店を出して2年もしないうちに、客の男と駆け落ちしたのだ。それから数日間、彼女の行方は杳として知れなかつた。

消息がわかつたのは、2006年秋のことだ。当時、ニーサが暮らしていた地域の住民が、瀕死の彼女をマイティに運びこんでくれたのだった。ニーサ自身がそう望んだのだそうだ。一緒

に逃げた男は、体調を崩した彼女を置き去りにしたらしい。

敷地内のクリニックの屋上に、隔離病棟として建て増された一室がある。感染率の高い型の結核患者のために設けられたものだ。人の出入りを防ぐため、屋上に鉄製の螺旋階段が設えられ、それが病室に通じる唯一のルートとなつていた。

ニーサとの再会は、その病室だった。窓際に寄せて置かれたベッドに、彼女は横たわつていた。身体からは、脂肪も筋肉も徹底的に削がれ、かつての面影はなかった。それがニーサであると確認できたのは、大きな瞳と、笑つた時にのぞく白い前歯によつてだった。「窓から、アンティイの声が聞こえたの。会いたいなあと思っていたから、嬉しいです」

「そう。私も会いたかった。本当に久しぶりだね。ご飯、食べられてる？」
「あんまり。でも、少しずつ調子がよくなつてる気がします。今度、ご飯、

作りますから、一緒に食べましょう。

私、料理、得意なんですよ」

けれど、彼女は手料理をごちそうしてくれないまま、その数日後に逝ってしまった。

あの時のニーサの姿が、チャンヌーに重なる。そして、チャンヌーの失踪時、アヌラダさんがつぶやいていた言葉が思い出される。

「あの娘は、男を渡り歩いて生きていくのでしょ。それが知れば、他の女性たちの評判も落ちることになる。相手の男にHIVを感染させるリスクもある。だから、無理にでも連れ戻すべきなのでしょうが、今、彼女に何を

言っても聞く耳を持たないでしょう。

でも、この先ひどく体調を崩した時に帰ってくると思います。あの娘には、他に頼るところなんてないはずだから……」

チャンヌーに再び会えるのは、ニーサが最期の時を過ごしたあの場所なのかもしれない。

この想像が現実のものとなったとき、私はきつと、彼女が選んだ命を縮めるばかりの生き方を恨めしく思うことだろう。けれど、ひとつとして責めることもできず、ニーサの最期の時と同じように、たわいもない会話に終始するに違いない。

「売春宿で働いたのも、病気になるのも、好きでそうなったわけじゃない！ なのに、どうして私ばかりが我慢や努力を強いられるのか！ 我慢や努力を重ねれば、幸せが約束されるとでもいうのか！」

チャンヌーにそう問われても、私にはなにも答えられない。

インドでの5年間は、チャンヌーから女性としての幸せのすべてを奪った。人を好きになる自由も、幸せな家庭を持つ夢も、健康さえも奪った。いくら売春宿から救い出されても、一度、失ったものは取り返せない。彼女たちの人生は、もとは戻らないのだ。

「美しい国」が好きな人には読んで頂かなくて結構です。

Shincho Sensho
新潮選書

最新刊

醜い日本の私

中島義道

微温的な「心地よさ」や「気配り」の裏側に潜むグロテスクな感情を解き明かす、異色の日本文化論 ● 定価1050円(税別)

この商店街で人びとは毎日買い物をして、ここを朝夕通過しても、この露店に吐き気がすることはない。露店を告発する市民運動が盛り上がることはない。ここが問題なのである。(本文より)

新潮社

1月号 2010
第29巻第1号・通巻第333号
平成22年1月18日発行（平成21年12月18日発売）
（禁無断転載）
特別定価790円

編集兼発行者
宮本太一

発行所
株式会社新潮社
〒162-8711 東京都新宿区矢来町71
電話【編集】03-3266-5445
【営業】03-3266-5111

印刷者
北島義俊

印刷所
大日本印刷株式会社

©2010 SHINCHOSHA Printed in Japan

来月2月号は、
1月18日発売です。

- ◆豊田正義氏「根性を忘れた日本人へ」、柳田邦男氏「日本人の教養」、上條昌史氏「シリーズ「昭和」の謎に挑む」は、今月休載します。
- ◆JASRAC 出0915766-901
- ◆写真提供・共同通信社(P4、P93、P94、P97)
清忠之(P98)

マイティには、アプサラの娘アーシヤのように、HIVに母子感染した子どもたちが26名、保護されている。自分の病気を知らない彼女たちは、楽しんで文字を習い、無邪気に庭を駆け回り、「大きくなったら学校の先生になりたい」、「私のお医者さんになりたい」と、思い思いの夢を描く。

だが、彼女たちが大人になるということは、チャンヌーやアプサラがたどった同じ道を歩いていくということに他ならない。差別に晒され、死への不安に押しつぶされそうになりながら、たくさんの諦めを胸の奥底に折りたたむようにして生きていかねばならないのだ。

そんな未来に、確かな標を示すことができないでいる私は、健やかな成長を願う一方で、彼女たちの時間だけ止まってしまうばいいのにと思う。「ずっと子どものままでいられたらいいのに」と、叶えられるはずもない願いを抱くのである。

（はせがわ まりこ）